



針葉樹會報

團衛谷北鎌紀行

團衛谷を下る

(クマ)

七月十七日待ちに待つた久し振りの日本アルプス行きだつた。人夫の下川からは「アメヒノベイカガ」といふ電報が來たが天氣の悪いのは俺のせいぢやないさ許りに強引に新宿を出る。いつもバーティから孫さんさペン公の居ない事は淋しかつたがその代り現役の錚々たる干ちやん、望月君が同行して呉れる事になつたのは何より氣強さを増して呉れたものだつた。此の他御馳走を澤山持つて來る十八貫の近ちやん、小生の親戚高梨の信ちやん、之が又岩に強く雪によしで流石の干ちやんも一歩譲つた模様だつた兎に角メンバーは以上の様な組合せであつたから始めから終りまで和氣藪々と山旅を楽しみ得た事は云ふまでもない。

氣の毒な林と或る事情で同行出來なかつたベン公の見送りをうけて十時四十五分新宿を後にした。松本まで小生の妹二人が同車である。甲府を過ぎて夜も明けたが甲斐駒も八岳も今日は雨雲に

隠れて姿を見せぬ、多少憂鬱な氣持ちになつたが松本が近づくにつれて次第に夏空らしい大きな入道雲が王ヶ鼻方面に現はれて呉れた。六時廿分頃松本着、飛彈屋の若主人が下川の有明驛に待つ事を知らせる。妹達は此處から筑摩電鐵で島々へ向つた。

頂を隠した懷しい有明山が近づいたと思ふとやがて有明驛、出日の處に十年振りの下川の顔を見た、その昔今は逝きし中島や健在の金田、手塚の連中を連れて燕槍を縱走した時、二十三人の殿りを務めて呉れた下川、その後雪の針木峠を越して平の小屋の滯在が長かつた爲め新聞種になつた時心配して手紙を呉れた下川、技倆の割に一般に知られてゐない下川、本當に懷しい再會である。

自動車で温泉を経て一之瀬へ、途中塙田の墓のある附近でその方面に向つて目禮をして行く、あの元氣な人のいゝ塙田も此の世には居ない、朴訥な彦さんもその温顔を見せては呉れないのだ、一昔の裡に幸福さうな日當りのいゝ此の村にも色々悲しい出来事が起つてゐたのだつた。

一之瀬からいよいよ徒步、中房川の水が青白く遙かの眼下に白い花崗岩の間を奔下して行く、雨上りの爲めか水量が馬鹿に多い。道路工事のハツパの音が時たま周囲の谷にこだまして青葉に輝く山壁に可愛いゝ轡りを續けてゐる小鳥達の耳を驚ろかしてゐた。此の分で行くと二年と経つて裡に信濃坂まで自動車が通づる事になるのかも知れぬ、さうすれば中房温泉まで足を使はずに行ける事もさう遠い將來ではないだろう。

信濃坂附近は全く昔の閑寂な趣はなくなつてゐたが坂の手前の

休み茶屋だけは發電所の近代建築に凡そそぐはぬ對照の一つとし
て昔ながらの燐つた山中の一軒家らしい姿を保つてゐて、私達の
一昔前の旅を眼の前に彷彿させて呉れたのは唯一の慰めでもあ
つた。

先輩江口老が名付親となつた天上澤にある天溪堂に一寸寄つて
老公の消息を聞き歩調を早めて温泉へと向つた。晝頃豫定通り中
房着、老公はもうそろく下山の仕度をして居られる處であつた
少し許り當てが外れたが記念の撮影だけしてお別れとする。新し
く出來た食堂でカツ丼を平らげ一時最後の登りにさかゝる。

新婚早々らしい夫婦者が人夫一人を連れて後になり先になり登
つて行く、此の人達が殺生の小屋で妹達や山岳部の連中に色々細
い心使ひをして呉れる事にならうとは神ならぬ身の知る由もなか
つた、といふ譯である。雨が時々やつて来る、然し登りには却つ
てい、おしめりだつた、何かと文句をつけては休んでゐたので燕
山莊に着いたのは五時半になつてゐた、途中商大の人人が二人槍の
西岳で死んだといふ事を下山者に聞いてピックリしたが後から來
た人にそれは早大の人で西鎌尾根でやられたのである事を知つて
安心した、安心したと云つては悪いが兎に角商大の者でない事が
解つてホッとした譯だ。

燕山莊も今は昔の傳もない、赤沼さんも小屋の親父ではなくな
つて専務取締役といふ名前になつてゐる、寢室なども汽車の二等
寢臺的になつてゐて蒲團や枕も極上品だ、之ぢや家に居るより餘
程上等である、宿料は高い(?)が西洋料理のもりつけで相當しや

れたものを出す、但しどういふ譯か他の小屋に比して飯がまづい
之は改良する必要があると思ふ。

心配してゐた右足の膝關節もどうやら痛んで來ない、之は確かに來る前の日曜に谷川へ行つてトレイニングして來た賜だつた、此の日はごつちかさいふと近ちやんと小生二人の方が現役の人達よりも頑張りが利いた様に思ふ。

× × ×

明くれば十九日、カーテンを除いて蒲團から首を出すと硝子の
這入つたドアを透して戸隠方面の雲海が素晴らしい、床の中か
ら御來光を眺めるのも又一興である。寒さに身を震はせ乍ら雲海
に浮ぶ鹿島槍をカメラに收める、小屋裏の高臺に立つて槍を眺め
るこ實際大きく見えるのだが寫眞にさるこ之は又馬鹿に小さくな
つて了ふ。今日下ろうといふ團衛の谷はまだ充分眠りから覺め切
らぬらしく何事もなげに高瀬に向つて静かに落ちてゐた。勿論流
れは一ヶ所も見せては居ない。此の谷に大小取交せて五十以上の
瀧があらうとは知らぬ者には想像も及ばぬ事であろう。

赤沼さんに色々御世話になつた御禮を述べてから、悪い事は云
はねで「越ジ」をお下り、といふのに其の忠告を感謝して一行はい
よく燕へと向ふ。燕三角點の西北の鞍部邊りから「越ジ」と團
衛を振分ける尾根がある、「越ジ」の澤へ下るのも湯俣岳東の大澤
の對岸に尾根通し下る道も途中まで此の尾根を辿るのである。吾
々は此の尾根の二四二〇米突圈の峰の手前の鞍部から團衛へ這入
る事にした。燕の西北鞍部へ出る爲め三角點に登らず捲いてゐる

さ三角點の所に居た登山者が二人許り「何處へ行くんだあ——」
ささなるから「槍だあ——」といふと「それちや道が違ふよ——」
さ來たので暫くだまつてゐて「廻つて行くんだよ——」と奴鳴つ
てやつた、うるさ型は之で姿を潜めて了つた様だつた。

小憩の後淺露に濡れた新鮮な道を鞍部へと下る之から下生への
少ない斜面を團衛の左俣に向つてヒタ下りに下る。途中から澤通
しに傳はつて案外あつさりと本谷に出て了つた、はじめ兎の足跡
について下りたので此の澤を「兎澤」と假稱して置く、此の澤の
出合の直ぐ上は瀧になつてゐた。「五段の瀧」とつける、此の上
に下川の話によると一つ素晴らしい大きい瀧があるらしい。

之から先委しい事を書いたら切りがないので團衛谷の概念だけ
をお傳へして置かふ、報告はいづれ千ちやんが「針葉樹」の方で
やる事と思ふ。此處から次の澤(右俣)の出合までは平凡である。

然し問題はそれから川九里澤の出合までとあつた。此の間大小取
交せて前にも云つた通り五十以上の瀧がある、といふよりも瀧の
連續で谷が出來てゐると言つた方が適當かも知れない。一の瀧の
傍を捲いて尾根の鼻へ出ると言ふと谷は已に遙か眼下になつて了ふ、之
が度々なのだから全くウンザリして了ふ。谷筋に下りたのは兎澤
の出合を合せて九回、それで漸く瀧から開放されて高瀬の廣い川
筋に出る事が出来た。著しい瀧は三つ、一つは略々中央にある「中
の大瀧」上から見た處では日光の華嚴位はあり相だつた。次は
「スダレの瀧」之は高さは大した事はないが巾が廣くてスダレの
様に幾筋にも水が分れてゐる。最後は團衛谷落口の「大瀧」であ

る。即ち川九里澤の澤筋へ團衛は約二十米突の瀧となつて落ちて
ゐる。途中のヘツリにも相當嫌な所がある、湯俣温泉で温い蒲團
に潜り込んでから近ちやんも干ちやんも斯くいふ小生も此の嫌な
ヘツリを思ひかへして夢現のなかにズルくと引きづり下ろされ
る様な氣がした。之は後に三人が話し合つた結果わかつたもので
あつたが神經の疲れにともなつてこんな事が腦裡をかすめ過ぎた
のかも知れない。

ザイルを使つたのは四度、四度目には三十米突と二十米突を合
せてダブルにして漸く開放された。普通だつたら此の二本位は用
意して置かぬと無理だろうと思ふ。近ちやんとザイルの取組みは
相當の見物であつた。何しろあの十八貫の身體、全部で廿貫の重
量をさばくには相當の骨が折れたらしい。小生などがツルくと
兩手で下りて来る所を近ちやんはアップザイレンの本式のやり方
でないと身が保てないので、あれでよくビンになつた樹が根こそ
ぎはがれて了はなかつたものだと感心した次第である。それから
オーダーがいつも大概下川、小生、信ちやん、近ちやんの順であ
つたから悪いヘツリの場合足がとりがい、加減崩れた後で近ちや
んが通る事になるので之には大部懨まされたものらしい。後で盛
んにこぼしてゐた。

はじめ多くも六時間で湯へ行けると思つてゐた處へ正味十二時
間と此の間可なりの休憩時間はあるが一かゝつたのには實際驚い
た。北鎌へのトレイニング位の積りが完全に一日の労働となつた
のだから馬鹿に出来ないものだ。

登りきなると相當問題である、下つた所をそのまま、辿るとしても一日半以上の行程となる。それに一度でも下つた事がないとする可なりルートの判定に苦しむものと思ふ。狭いながらもテントが張れ相に思へたのは水のそばでは二ヶ處しかない。増水でもしたら之もどうかと思ふし第一増水したら絶対に通れぬから餘程天氣を見定める必要がある。赤沼氏の「云ひ草ちやないが」「コレバコレハ」と云ひ度い處が相當あるのだから可なり慎重な用意がいると思ふ。

兎に角吾々は團衛を下つて儲けものをした様に感じたのは事實である。

—お次は近ちやんに譲る—

湯俣温泉から北鎌の一日

(狸)

せいじく五六時間位の今日の團衛谷が十二時間かゝつた、全くあきれたものである。もう途中で散々あきれて來たがいくらあきれて居ても一向にらちがあかず、到々フランク状態に近からずと雖も餘り遠からざる状態に於て温泉に着いた。此處で温泉と云ふ液體は如何に有難いものであるかと云ふ事が分つた。

我々が温泉に浸つて出てくる頃には早や宿貲の割引交渉が出来て居たとは夢知らず、食事の席で大聲で「今日の泊貢はいくらだ」と云ふと熊さんが「シー」と手まれて制する。ハハン合ひ客の手前知らぬ振りをせいとの事と分つて聲を呑む。

處が翌朝になるとどうだ、肝心の熊さんが頗る此の點に關しても開放的である。朝食は外のお客二人と同席で始めた。處が席上に生卵が二個のせてある。僕は「ハハーン」割引客たる我々には卵はないのだなと直覺した。處が此の點を覺らない紳士が二人居る熊さんとかんちやんである。

先づ熊さんが「あ、卵が足りない、卵だく」と大聲をあげる向側の僕は先ずひやくする。處が熊さんの隣に居たかんちやんが「ツト」手をのばしたかと思ふと二人客の前にある卵の一個をいきも公然平穏に取りあげてカンくと手ぎわ良く割つたかと思ふとべろりと腹に入れてしまった。驚いたのは僕ばかりであるが一同は頗る平氣である。二人のお客の内、卵をさられたお客は我々が割引客なる事を知らないので「いまに卵が出ますよ」と云つてもそく食べて居る。熊さんはまだ事情が分らず「卵はおそいな」「どうしたのだらう」と我ん張つて居る。

ほうくの態で食堂を逃げだしても、まだ熊さんは分らないのだからあきれる。後で聞くと「卵を食べたい」と云ふ氣持で居た處へタマく卵が二個出たので卵が如何にして二個食卓に出たかを再吟味する理性を食べたい感情がすつかり抑えつてしまつたらしい。

捌て元氣一杯で六時少々過ぎ温泉を出た。今日は北鎌尾根を登つて槍に出る日である。湯俣澤と別れ千丈澤と別れ、段々天上澤の奥へと進む。天上澤が急に廣々として來た頃、前方から一人のお客をつれて來た人夫がある。

熊さんが急に立止まつて大町の傳刀さんだと云ふ。嘗つて若かりし時、さんちやん等と穗高を縦走した時連れた名案内人傳刀林藏であつた。一緒に記念撮影をする。

「今日はこれからどちらへ」さ林藏が云ふ。「北鎌から槍へ」と答えると「それは大變ですね、少々無理だね」と云ふ。

時間もないのですぐ別れ、それから二十分位歩いて川原に出て荷物の大部分を川原の蔭にかくし身軽になつて槍迄行き翌日下川に此の荷物を天上澤乗越から取りに来て貰ふと云ふ計畫である。此處で早目の晝食をする。槍の頂は早や霧にかくれて見へない。是れから登らんとする北鎌の山稜は高くく、中空に續いて居る。

時に午前十時過ぎである。是れから約二九〇〇餘米突の獨立標高點迄はひた上りに登らねばならない。

北鎌への登り口が良く分らず、考へて見ると可成天上澤をつめ過ぎたので下るのもいやなので裏の「ガレ」から眞直に獨標目がけて上つて見様と云ふ事になつた。

先ずガラ／＼の石コロの澤を登る事約二百米突、此の途中口の中に入れて居た「スルメ」がどうしたはづみか息をする方へ行つてしまつて、えらい苦しい目に會つた。

「スルメ」迄が道を間違えるかとしやくに觸る。

カン／＼陽は照り赤茶けた岩塊は飽く迄暑い。あえぎ／＼登るさ到々雪渓のある處迄來た。此處で下川は道を探して到々雪渓の向側に真直ぐ屏風の様になつた澤を登る事に決める。見上げた處岩場は何處迄續いて居るか分らない。

是れから緊張した登攀が續いた。此の澤には斜に開いた一條の岩の「ヒダ」がある。此の「ヒダ」を時々利用せねばならない。二百米突位登ると下川は用意の「ザイル」を出す。此邊の岩場は全く相當なものである。

「ヒダ」の中には手掛りも足掛けもない處がある。此處を行は「ヒダ」の面に背と足と手と突張つてズリ上る所以あるが、十八貫五百の小生は仲々その簡単にズリ上る理には行かない。ズリ下るのを防ぐのに勢一杯である。全く大變な處である。熊さんやかんちやんはそう云ふ處は喜んで如何にも楽しそうに岩に親しんで居る。

美しい限りであるがこちとらは一生懸命である。一寸でも滑つたら後は頗る明かる結果になるので歯を喰ひしばつて登る。此の惡場を過ぎて少し上つてから綱の助けを借りる。

熊さんなんかの時は下川は急斜面で可成不安定な足場でザイルを確保して居るが僕が登る段になると「十八貫の旦那一寸待つてくれ」と云ふ。何をして居るのかと見れば足場を探して居るのである。僕が登る時には熊さんの時の足場では確保の自信がないのである。それでもどうやら上方に緩傾斜の草付きが現はれて來たのに一安心した。が而し早や澤を出て三時間を費してしまつたもしや獨立標高點直下の本尾根に出たのではないかと云ふ希望は此の尾根に立つて全く粉碎されてしまった。見渡せば遙か彼方に本尾根が見える。

而も今一行が登り着いた支尾根は直接獨立標高點に續いて居る

峻嶮な一支尾根である事も分つた。是れから此の支尾根に添ふて密生する雜木の中を泳ぎながら雜木につかまりくして上るのである。此の雜木帶に来るさ體重の重い僕が俄然有利である。かんちやんなんか樹の枝にはね上げられて樹になつてしまふ。僕が上る時は大抵の枝は下方に曲つて通路を開いてくれる。此の登りが約二百米突に及ぶ頃到々我々一行は重大なる決意をせねばならなくなつた。もう獨標と思はしき邊りにも霧が降り此の支尾根も時々ではあるが雨が来る様になつた。時に午後三時である。上を見るさ獨標の直下にある此の支尾根中の一峰迄に至るには二つの「ナイフエッヂ」の如き「キレット」二つを越して更にどう見ても三百米突の激しい登攀が我々を待つて居る。時間に見て三時間はかかる様に見える。而も天氣は益々悪く、雨は段々頻繁になつて、岩場をぬらし始めた。どうせ一晩位の野營は覺悟であるが翌日の荒天を更に槍迄の登攀は明かに無理である。一行は到々下りる事に決める。案内人の下川は如何にも殘念そうに悲痛な顔をして「誠に申譯けない」と云ふ。然し登れないのは下川の責任ではないので却つて下川を慰めて下り初める。「此の支尾根の此の上獨標迄の登攀は時間さえあれば決して不可能なものでない様に思ふ」

何にしろ昨日十二時間の活動に今日又此の激しい登攀に一行は全く疲れて居る。下りは一つ北側の澤へ下りにかゝつたのであるが是れが又大變な澤である。約七百米突位の下りである。而もよくもこんな急な澤に樹が生えられるご感心する位急な斜面に全く

文字通りの密生樹林である。四百米突も木にぶら下つて降つたと思ふ全く急な處に出た。此處から數度ザイルを使つて到々雪渓のある本澤に出た。

開放された我々は雪渓をぐんぐん滑つて天上澤に出た。早や夕闇は天上澤をうづめ遙か北鎌の上に渦巻く霧丈けが薄白くなつて足元の石ころにも躊躇ながら何んだか落膽かりして今朝休んだ河原に戻つて來た。時に午後七時。今日も十三時間労働である。到々天上澤に露營を決めた。川端で火を盛んに焚いて熱い紅茶に疲れを忘れて快談した其時の下川の話にこんな面白い話がある。或夏の暮れ西岳小屋に下川が居た時の事である。霧が深く立ちこめて少しも先が分らぬ様な晩であつた。突然警笛が闇を突いて小屋に響いて來た。一分間に六回、十秒置いて、又六回、正しく國際山岳遭難信號であつた。下川は吃驚りして仲間の者數名を暗闇をくぐつて警笛の起る方向へ進んで行つた。然し諸君、場所はアルプスの有名な銀座通り喜作新道である。而も鳴る警笛は玄人登山者のみ知る國際遭難信號、其處に何事が重大なる突發事故があつたに違ひない、と聞きながら考へて居た。

乍然それからの下川の話はこうであつた。警笛は愈々近くなつて來た、場所はどうやら新道から一寸離れた平坦な這松地帯らしい。道から大聲で「どうした」と救援の言葉をかけて勇敢に進んだ下川は其處に息も絶えくに打倒れて居る二人の登山者を發見した。而も一人は御婦人である。

此處迄書いて來たら氣の早い讀者はオヤと氣が付くかも知れな

い。「バランス、クライミング」の權威、典型的夫婦登山の實踐家、苦勞田覽棹氏其人が今や見るも哀れな疲労に動けなくなつて居た、その事である。「苦勞田さんは今は東京では大家だそうですが此邊に御出になればね……」と下川は言葉を濁してしまつた。質素な下川の口から意外にもこんな面黒い話が出た。

こんな話を聞いて居る間に何時の間にか樹の間がくれば月が輝き出して青白く天上澤乗越の雪渓を照し始めた。何時から落込んでか眠りの世界……あの夜の景觀が幻の様に胸に浮んで来る。

天上澤乗越より神河内へ

(K A N P)

七日廿一日、昨日北鎌尾根の東方に派出せる一側稜に取りつき登頂せんとして、時間や、天候や、さては連日のオーバー・ウワーグの爲、おしくも主稜の一歩手前で追ひ歸へされた吾々は、コンチヤンの記せる如く天上澤の河原に露營した。此處は天上澤の水がもう少しで雪渓に化さうとする處、即ちあの狭い谷が次第々々に廣くなつてきて丁度カール状の谷にうつらんとするあたり。うそくして眼をさましてみると豪勢な焚火も幾分下火になりかゝり、右の方には下川が無様な恰好をして横になり、コンチヤンは左の奥の方に小生のシユラフザックの中で暖か相に夢心地（少しが軒が聞えたかな）ウスツペラな寝袋に入つて居るクマさんもNチヤンも火のせいか割合よくれむつて居る。ウインドヤツケ（何かの役に立つものを持参した）を着、リュックサックの

中へ兩足をつゝこんだ小生は、眞夏と云へども深夜は冷えこむ、こゝ天上澤の夜風に眠りを妨げられて、焚火をかき立てては又ゴロリとなる。どうもれつかれない。一昨日は十二時間、昨日亦十四時間近くの登行から考へればれられぬはずはない。その中に向ひの赤岩岳あたりの上方がボーッと明るくなつて、ぞつとする様な月が足早やの雲間から矢の様な光を射てゐる。まゝよさばかりれむられぬまゝに火の傍に坐つて、一服やつたり口を動かしたりした。そして辻村さんの「ハイランド」中にある「高瀬入り」の文中の野營地はごの邊かいな、などとバイオニヤーの努力をしのんだり等、殊勝な思ひをしたものである。その中にいやな雲が月を全くかくしたりは暗くなり、火の勢も又下り坂となつたのでそのままゴロリとなつてうそくしたと思つて眼をさましたら、もう暁。下川が眠む相な眼をして火をおこして居たです。

天氣は案の状悪。雨こそ落ちぬが雲足は悪く槍の穂先は勿論見えない。昨日北鎌の側稜で下山を發議したクマさんもこの天氣では、それ見ると云はねばかりに鼻高々。朝飯もそろそろになつたしの露營地を立つたのはまだ七時頃であつた。左の足の痛むNチヤン右の膝の痛む小生疲れてゐる兩先輩、ボツリ／＼天上澤乗越へと向つたです。

天上澤乗越に立てばこれは如何に。殺生より來た通りすがりの人夫の報じて曰く。殺生に商大の連中多く泊りて小生等一行の安否をきづかふ。その言聞きすてならず、クマさん、コンチヤン下川は乗越より槍澤小舎に下り再び逢ふ事を約し、Nチヤンには

氣の毒であつたが、小生と共に殺生迄飛ばした。天氣が悪いので此のアルプス銀座と云はるゝ尾根も人ツ子一人居らず、おかげで随分飛ばせた譯です。殺生に着いたらこれは又如何に、商大の連中はたつた今下つた事。踵をかへして槍澤の雪を一氣に下るこの雪渓はなんの事はない、雪の上に車の轍の様な二本の太い溝

がついてゐて兩足をその中に入れて走つて行く雪の上の道だ。

槍澤の雪渓で滑つて轉んでさては遭難と云ふ記事を耳にするが、一體何處で滑つて轉ぶんだか全く不思議な位。槍澤の小舎に着いたらクマさんをはじめ殺生から下つた連中、クマさんの令妹二人もまぜて實に大勢。その勢天をつくものあり。晝飯を食つていよ／＼吾等のテントのあるなつかしの神河内へと下山の途につく。その光景を金魚のウンコとはよく云つたものだ。全くさながらその通り。殊にクマさん、コンチヤン、小生等はイギタなき最たるもの。クマさんのいでたちは、例のズボン（この自稱防水ズボンは往昔よりのもの。會員諸氏中でクマさんと行を共にされた方はキツと知つて居るはずのアレですぞ）に巻ゲートル、Yシャツは白かつたとは思へないもの。コンチヤンは又一番上等な切地と称するニッカーチーが既に分解作用をおこしMボタンのあたりは實にやしい。もつともかく云ふ小生もこの御兩人には負けず劣らず。

團衛谷で見事尻をやぶつたニッカーチーには手拭ひの穴ふき、Yシャツは汗でブン／＼にほふ。更に又他の連中の恰好たるや正しくチンドン屋の如し。柿原神主は明治何年かに流行つたとか云へる縦縞のYシャツに、父子二代に亘る古パナマ、カマキリこと森川

は下川とならぶとかへつて下川がお客様に見える程の人夫タイプ、エテ公こと榎本はソフトに手拭ひをまき長ズボンを膝迄まくつた態他は總てこれと大同小異。これら十二名がクマさんを先頭にノツシリ／＼神河内入りをした光景は正しく昭和聖代の珍景であった。

途中槍見河原で記念（？）撮影。牧場と吉城屋で休憩。かくて西糸屋から飛び出した神河内のモサ、助サン、エチ坊、パンチヤン等に「ハイル／＼」とばかり（何がハイルだか解らないが）迎へられて入幕しやしたです。

夜に入ればコンパですげきもの、飲めれ、食へれの連發。テントの外はたちまち空瓶の山。これがたゞつて商大は一躍飲みすけが多いことに出世したことは後で聞いた話。俄然玄文澤一帯の空氣をゆるがせて深夜迄、アノ世の如きサワギであつた。

七月廿二日、明くれば天氣晴朗。焼に行つたクマさん達は、裸かでゾロ／＼登つた相な。中には下駄、草履のものもあり、最も甚だしきは跣足であつた。途中にて松澤山岳部の命名を得たのは全く故なきにあらずだ。

一方テントにのこりしコンチヤン、小生等はホテルにのびて、ソーダ水一杯（とは云ふものゝこれが又高いのですぞ、もつともコンチヤンがおこつた）で半日ねばつてボーキの眼にこまる。しかしホテルは本當に素的だ。W・Cだけ使ふにしても上乗だ。これを用ふるに手アリ。少しは汚なきナリにても可。すう／＼しく喫茶室に入る如き姿（これが中々むづかしい）して扉を開け、そ

のまゝW・Cの方へ入つて後また何か食つたり、飲んだりした如き姿して出てくるを可とす。

かくして今度の旅も大體千秋樂を遂げた譯だが、松本行のバスの出が悪くて又一モメ。クマさん達は先に行つて了ひ、のこつたコンチヤンが怒ること全くすごい。あのやさしいコンチヤンがかくも怒るとは神様ならぬ小生等の知るよしもなかつたところだ。爲に、バスの係員が林中に逃げこむ等、この旅掉尾のエピソードであります。

手前若輩をかへりみず、兩先輩を呼ぶにクマさん、コンチヤンを以てせり。こは針葉樹會の不文律により許さる可き事とは存ずれど、悪からず、一言添へ奉る。尙、文中Nチヤンとあるは吉澤氏の一族の方で今度行を共にせる快男子、高梨信重君の字なり。

前穂高岳に泊るの記

(エチオビヤ)

降り續いた雨も、今日はどうやら晴れさうだ。霧はあるんだけれど、なんなく明るい。散々、天幕に閉ぢ込められた後の事だから、『こんな時に行かなけりや、行く時はねえ』と、カマキリネコ、サル、雄四郎、それに斯く云ふタージーの五人(?)は、勢ひよく出掛けました。行く先は明神岳。尤も、カマキリとネコはついでに槍岳迄縦走しちまはふと云ふ、けなげな意氣込み。残りの三人は、言ふ迄もなく。前穂まで行つて日歸りと云ふ、極くお

さない考でした。ところが、困つた事には、間もなく又雨が降つて來たんです。するご皆、濡れる面積を最小にしやうとも思つてか、立つたつきり動かないんです。そして『斯んな天氣ちや上へ行つたつて面白くない』なんてぜいたくな事を云ふんです。でも幸ひ、間もなく雨も止みました。

併し今度は、雨でビショ／＼になつたブツシユと戦争して敗かれたり、霧の中で所謂ギヤップを巻かうとして、變な踏跡にだまされたりしたので、さぼ／＼と前穂の登りにさしかゝる頃にはたゞ／＼太陽も、西穂の向ふへかくれやうと云ふ始末。

そこで皆が、こりや暗くなるね、と思ひました。そして、直ちに如何にすべきや、と云ふ問題が起り、それに對して、二つの主張が對立するに至つたんです。

日歸り派の言ふ事には——勿論、彼等は燈なんか持つてなかつたんですけど——『少し位暗くたつて構はない。林道迄出ちやへばい』んだから、下らうぢやねえか』と言ふんです(彼等の此の悲壯なる決心の裏には、清水屋食堂の冷い○○○が如何に強く働きかけたかは言ふまでもありません)

又縦走派は『夜道をして、間違ひを起すより、頂上で一晩泊らう』なんて、殊勝な事を云ふんです。(之は實を云ふと、彼等穂高小屋の小屋代、タイマイ三圓ナニガシを、ケンヤクしたかつたのだ、と云ふ事は明々白々なる事實です)で、甲論乙駁の末結局、前者が後者に同情して、頂上に泊る事になりました。泊ると言つても、別にする事もないんで、皆、あの四角く石で囲んだ

穴の中に、坐り込んだんですが、日歸り派は、それでも尙、未練がましく、上高地の燈を見ては、グツと睡を飲みこんでゐた様でした。

然し、人間の嗜好は、氣温の變化に應じて、急激に變化する見え、暫くするご、誰ともなしに、あついおでんが食ひたいと言ふんです。でも、殘念な事には、ビスケットと、みりんぼししか無かつたので、それを一時間毎に食つて、一晩中騒いでゐやうと言ふ、決心をしました。最初は、一時間が、隨分長かつたです。北斗七星が、あすこからあれだけ動いた、なんて見てるんですから。

そして、一時間たつと、新聞紙を一枚だけ燃して、其の火で、あわて、みりんぼしを焼くんです。でも、夜中の二時頃食つたそれは、實にうまく、家へ歸へつたら、毎日、みりんぼしで飯を食はうと思つた位でした。

兎に角、泊る用意は何も無く、殆んど、歩いてたまゝトマツた様な恰好なので、明方はかなり寒くふるへました。

併し、比較的天氣のよかつたのが何よりで、お蔭で、前穂から見た朝の奥穂や、北穂の寫真を、撮る事が出来ました。朝のです。矢張り、あすこからは、朝が一番いゝ様ですね。

今年の夏は種々な關係から例年とは異つた山旅をしました。何

常念の記

(KANP)

時もの夏ならば縦走の大嫌ひな小生は例へば唐澤とか劍澤とかのテントの中に籠つて、半分はノビながら、たかだか八時間か十時間位のアルバイトを以て往復し得る峰々に歩みを運ぶのです。が今年は大先輩吉澤、近藤兩氏の誘惑打勝ちがたく、出にくい處を無理をして七月十七日の夜、暑い東京をあさにしました。ところは燕から團衛谷、この行については既に述べられてあると存じます。かくして上高地に到着し兩先輩をお別れしてからが又縦走をして了つたのです。よくよく今年は縦走に縁があつたものとみえます。と云ふのは上高地に着いたのが廿一日、そんなに長く滞在出来ない小生は、唐澤へも錫杖へも行けず、と云つて金一圓五十分也で上高地をあさにするのも、又今更徳本を越えるのも餘り芳しい話ではないので、ツラツラ地圖など出して眺めたものです。眺めた處で別に變つたことはありません。中尾を越えて飛驒にさすらひ出れば一日や二日では歸へれず、行く先は自づと常念越へあたりへ落ちた譯です。

かくして上高地のベース・キャンプと別れたのが二十三日の朝徳澤から大瀧山に登つて其の晩は泊り、翌廿四日、蝶、常念と縦走して烏川の一ノ澤から柏矢町に出て歸京しました。

今更、常念等に就いてこそ新らしく筆を執るテはないのですが小生共の期待を十二分に満足させてくれた此の山の背に就いて敢て下手な筆をとる譯は、次の様なことからです。

それは、一體この常念山脈——即ち東天井から大瀧に至る山波は地理的位置の關係から、登山道は良く踏まれて居るにかゝはら

す、人通りの極めて少い事です。殊に常念より南は僅少です。たまに地元の小學生、女學生の團體が通る外には、人氣のない境地です。次に、元來この山脈は穗高の展望に無類な地位を占めて居ることです。この事は種々な機會に種々な人々の口から云はれて居ることであるにもかゝらず、そしてそれを知つて居る人が多いのにもかゝらず、此の山脈へ登つてみて目前にその光景を見る人は割合に少いらしいのです。小生共の仲間の間ですら、最近では、先年十合、中島の兩君が燕から大槍へと縱走された外、今夏小生共の行く一日前に一年の内田君が行つた位です。

穗高の眺めは大瀧から蝶の間が壓巻でせう。蝶から北に進むにつれて、穗高の山波は次第に斜めとなり、常念に至るごとく各々の峰が隨分重なつてしまひますから、矢張り蝶附近が一番と云ふことになります、一體穗高の山脈は南北に走つて居ますから、これを一望の中に隈なく眺め得るのは東か西かであつて、西方は即ち飛騨の中崎の尾根か或は笠と云ふ事になり、東方は云はずものが常念です。が飛騨側から穗高を見たことのない小生には、その方面のことを云ふ可くもありませんが、瀧谷を中心として一帯に凄惨な、そして陰翳に富んだ姿を曝らして居るこゝ、思ひます。それに反し信州側は何處も長閑です。唯前穗の東面、即ち又白谷が比較的荒れて、切り立つてゐますが、他は美しい斜面ばかり。ですから穗高を最も雄大に、莊嚴に、そして美麗に眺めらるゝ處は常念と云ふ事になります。全くその眺めは素晴らしいものです、穗高の岩場が全部が全部一目ですもの。小生は想像します、四五月

の頃此の尾根に登り、蝶のひらたい大きな頂で、コツヘルを沸かし熱い紅茶かコーカスでも作り、パイプでも薰らして、半日穗高を眺めながら雪崩の音を聞いて暮らしてみたい。それはあながち實現出來なさうな事でもないのであります。積雪期にはもつと良い事には、徳澤もその兩岸をなす尾根も、その他此の邊一帯は雪崩の危険から比較的遠のいて居る様に思はれます。

この尾根に立てば、南は御岳から北は立山、劍に至る迄一望の中です。そして槍から穗高に連なる一脈の山波は最も印象的です。

東京から又關西から比較的高い足代をかけて北アルプスに入る人達は、常念あたりの、ごつちかと云へば、アルプス的景觀に乏しい山々に入ることは少ないので。それは尤もなことで、この山々は、長く穗高等に滯在した歸へり路、軽い荷物で越すべきものだと思ひます。さもなければ、人生五十の峠を越えてから家の子弟を引具して、或は荷擔ぎ人夫の三人も引つれて長閑に越すべき山でせう。その時穗高がなんぞ、越ゆる者の胸の中に、美しく甦へつて来ることでせう。常念は展望臺です。穗高を眺める爲に作られた山です。

最後に常念から村里へ下る道ですが、常念より前常念に至り烏川の本澤へ下りて須砂渡に下るものより、常念乗越から烏川の一本澤より塙原を経て柏矢町に至る道の方が、人が行くだけにいゝ道です。その他に大瀧山から鍋冠山を経て小倉村へ下る道もあります。これもいゝ道らしいです。

最近小生共此處を越えた連中の相談して云ふに曰く、新部員の燕槍縱走は須く燕、常念、大瀧に改む可しさ。これは強ち常念山脈よりの眺めに惚れ過ぎた者共の誇張ではありません。

(一九三四、七、三〇)

山岳會で拾つた話

(クマ)

夏の登山季節もそろく終らうとする八月の或る日の事、いつれ月水金の内何れかの日であつたに違ひない、○氏は例によつて開室時間の五時にはまだ小一時間もあるといふのにはや室内の掃除も終り、遅れた會報の發送に取掛つてゐる時であつた。誰かドアーノックする。

「お這りなさい」

といふ聲に遠慮なく入口に立はだかつたのは遂ぞ見た事のない御面相だつた。「どなたでせうか、御用は」

と聞くと

「へえ私は東京○○新聞の山野拔作と云ふ者でありますが實は少々御伺ひし度い事があつて來た譯なんで……」

「あゝさうですかどうぞおかげ下さい」話好きな○氏の事だ交番の巡査が詰らない違反者を捕まへて寝氣覺しの道具にするのと同じ様に(?)小さな輪轉機を廻しながらこうまあお世辭を云つたものです。其の新聞といふのは聞いた様でもあり聞かない様でもある様な早く云へば泡沫といはふか朦朧と云はふか兎に角其れ以

上には出ない存在のものである事は確かだつた。

「もう會員の方は山から歸つて來たでせうか」

此の唐突な質問には流石の○氏も驚いたらしい。

「えツ歸つて來た? 此の會には八百人も會員が居るんですよ那人達が何時行つたか何處へ行つたか又何時歸つて來たかそんな事はわかりやせんよ、私はそんな事を整理する爲めに此處に居るぢやありやせんかられ」

「あゝさうですか、そんなに居るんですか、然しリーダーが居てその人達が毎年夏になるご連れて行く事になつてゐるんぢやないですか」

○氏は、驚いたれ此の人はと云はね許りに

「そんな寝呆けた事を云つて貰つちや困りますね、此處の八百人の會員さん達はどれも斯界の權威許りでござだつてリーダーの資格のない人なんざあ居ませんぜ」

實はさうでもない事は知つて居ても相手をカモと見て恁んな風に云つたものだらう。するこ

「へえ、そんな會なのですか、驚きましたわ」

「そう驚くにも當りませんがれ、兎に角此處の會員達は何處へ行つたつて其處等にある會の連中の様に女子供でも歩け相な所へ行つて來て、俺りや今度はあそこへ行つたが速もすげえ所だぜとか槍ヶ岳なんかあ比べものにならねえやなんて威張りたがる遭難型は居ねえですから、少しお顔の色が黒くなつてゐるから今度は何處へ行つて來たんでと聞いても、いや別に大した所でもな

いよと自分の行つ來た所なんかさうべら／＼まくし立てるお目出度いのは居ねえですかられ、その實行つてる所は人跡未踏の場所許りで其處い等の人達に話したつてさつぱり解られえといふ代物でさあれ』

「へえ、そいつあ惜しいですね」

「何が惜しいんですね」

「何がつて吾々の商賣から云やあ特種ですかられ、よく他の新聞記者がネタをさりに來ないです」

「来るも來ないもありやしないですよ、山の事を知つてる人達は此處へ來たつて駄目な事を百も承知ですかられ、自分の下山の日を豫め町の新聞記者に通知して置いてさて驛頭に於てべら／＼さある事ない事しやべり立てる何處かの女流登山家の様なタイプの人はまづ居ませんかられ」

此處まで來てその山野記者氏は、こりや辻も相手が悪いと挨拶もそこそこにしてすらかつて行つたといふ、山野拔作氏鼻を抜かるの一席は殘念乍らこれを以て終結を致す次第なあり。

ペケペンペン

三次元麥酒譚

のみまはるさけのあわごこ

豊竹鎧大夫

御殿山、さては鮫津や鈴ヶ森、名だたる川も押し渡り、川崎鶴見も雨のうち、神奈川宿は生麥の、キリンビールに着きにけり、セメン造りの門のうち、乗り入れんとする折柄、詰襟着たる番卒に怪しき者を咎められ

「あとの車はよしとして先なる車の怪しき人態、何奴なるぞ」

「これは／＼お役人様、手前共はなんのまあ怪しい者ではござりません。御門内磯野さまにお目通り仕りまする手前は村尾、これに控へまするは、高橋、小熊、まつたこれは人相こそ、恐ろしうはござりまするが至つて氣立善き吉澤を申す山男ゆえ、何卒お通し下されませ」

漸々おさまる番卒の不審、あの車は咎め無く、玄關口に着きにける、デデンデン

夏なほ寒き零下二度、息も絶えなんビルの香り、又は灼熱地獄に勝る硝子の工場、巡るうちにも氣はそどろ、何時飲めるやらん、未だかいなア、あゝ焦れつたいと唾を呑む、連れて來る中川松木の古強者、しきりに咽喉を鳴らしつゝ、顔見合せて、泣き笑ひデデン地獄極樂見て廻り、汗を流しつゝに濡れ氣も狂はんと思ふ頃、漸く通る一室に、フライビングに鹽煎餅、立ち並びたるビール瓶、デデン、取る手遅しと瓶をば口にガツキと衝え、エイヤと氣張れば恐ろしや、栓はボロリと取れにけり、中に哀れを止めしは、日頃嗜む園山が、工場長の隣りに坐り、一口のめばジロリと睨まれ、豆を噛れば返事に詰り、さゞのつまりは味氣なく、煙草に紛らせたりけり、向ふ端には中川吉澤、矢作近藤の強者共

さる程に時しも頃は昭和十年文月なかばの十日とや、夏雨けぶる都より早車をつられて東海道、真一文字に過ぎ行く程に八ツ山

こゝを先途ご飲みければ、流石に、豆も酒も切れ、はやお暇をさ腰を上げ、恨めしげなる園山を、引立て行くこそ情なけれ、デン、デデン、デン

「園山のお蔭でよく飲め申した、なれどそれでは餘りに可哀想故、これより席を改め、大いに飲み直さうではござらぬか」

「それは一段ごよかろう、では萬事拙者にお任せあれ、悪い様には計らひ申さぬ」

指して行く花の都は元園軒、歸り車を口説き落し、飲み潰れたる學生共を袂を別ち、急げいそげや、東海道、しぶきを上げて舞ひ戻る、デン、デン

さて、これなるは名にしをう、グランドカツを見たは癖目か、これは又、茄子ライスと言ふ洋食か、ペロリペロンと平げて、足らぬ顔なる人もあり、飛行機に乗つて見度しと言ふもあり、艦政本部にいひつけて、帝國軍艦便乗き、見學好きの面々が、取らぬ狸の皮算用、ても恐ろしき、こちあなあ、デデンシャン

麥酒の泡を嘗めるの記

(コバヤシ)

何れ先輩の誰方からか御報告があると思ひますが、吾々學生からも一言あつて然るべしこ敢て惡筆を揮はせて戴きます。

去んぬる十日、磯野先輩のお招きに依りキリン麥酒工場を飲み倒すの會あると聞き（後に成り如何に大きな誤算を犯してゐたかどうか分りますが）何條控へてをるべきやと勇躍して雨を冒して大阪

ビールへと参じて見る意外や學生は望月と鷹野と自分の三人、日頃の飲み相手の小谷部が居らぬのが心寂しいが、えゝまゝよ彼奴の分まで飲んでやれと、クマさん、近ちゃん、ベンちゃん以下總勢十名自動車に分乗して一路京濱国道をドライブして川崎へと向いました。

やがて最初の自動車が工場の入口で不審訊問を受けた後から堂々と威張つて（と園山さんは稱してゐます）玄關へ乗りつけました。

既に磯野氏は先着、先づ工場見學と云ふので我々はごうせビルなんか五分か十分で出来てしまふのであらうと軽く立ち上りました、始めは清涼飲料水の製造過程、此の時孫さん來着、サイダーなんて昔懐しいなあと機械そのものが運轉してゐるやうな（全くそうなんですが）巧妙な出来工合を見てゐるうちには未だ々々元氣でした。

さていよいよビール工場です、となるとそれから以後はまるで夢でも見たやうな記憶しかないので、いや途中十五分程は當に正氣になつた處があるので、

さてビールの製造は——後で物の本に依つたのです——先づ大麥を水に浸して發芽させ、發芽した大麥にホップを加へて煮沸しその麥汁を探つて、これを酵母によつて發酵せしめるものであるさうです。

何故急に元氣が無くなつたかと云ふとあの日の濕氣の多い蒸し暑さにも依りますがビール製造の特殊な臭いと工場の騒音と温度

の激變なごに依るのです、なにしろ五度位の處、普通の庭、百何十度（之は華氏）の處なごをぐるぐるめぐるんですから山へ登るよりよほご苦しいです、松木さんは途中から來られたので始めをオミットしただけでも幸福です。

然るに途中の十五分程の間、しやんせざるを得ない事が起りました、之は私だけだらうと思ふんですがあの寒い室でビールの泡みたいな沈澱が浮いてゐる——何とも言ひようがないからかう言つて置きます——あれをなめた後なんです。

磯野さんが之を嘗めるご苦いぜと言ふので高がビールの泡をあなたがり何心なく指一杯についた奴を口に入れた瞬間、しまつたご思つたが運かつた、まるで熊膽かお百草を頬張つたかと思はれる苦さが口中に氾濫してつばきを二度や三度のみ込んだ位では到底治らないのです。ごこかに水はないかと探したが相憎見當らず真夏の暑い盛りに冷蔵庫みたいな中を苦蟲をかみつぶしたやうな顔して歩くなんて我ながら感心しませんでした。

然もそれがビールのエッセンス、悪い方のなんですから、キリンビールを飲み倒すなんて氣はそぞろ天外へ飛び去りました。

全くあの時だつたらコップ一杯のビールも飲めなかつたらうと思ひます。然るに工場の案内をして呉れた人は仲々親切でした。最後に百三十度もあらうと云ふビールビン製造場を見てくれたのですから。

熔鑄爐の如きものを見、フーフー汗を流し苦さが無くなつて漸くやつぱりビールは飲めさうだと云ふ事に成つたのです。

さて最後に皆が待望の出来タテホヤくの生ビールが出ました確かに市井一般に賣出されてゐるやつとは少し違います。やれ色が薄いの、甘味が少いのと色々御託宣を下しながらも皆結構飲みました、然しさすがにキリンビールの工場だけあって、十人や十五人位たばになつて飲んでもビクともしないらしいです。

僕はビールとサイダーをチヤンボンにやつたのでどうも少し酔い方がいつもより早かつたやうです。

麥酒は豊富に提供されるので未だくご思つてゐるご突然クマさんが工場長に別れの挨拶を始めたのでちよつと驚きました。隣りのTを見るごとに飲まんとコップに手を掛けた瞬間らしく恨めしさうにビールを睨んだ顔は珍妙でもあり氣の毒でもあります。之が毎年の例會に成つてくれれば幸いです、實際冷や々々しながら其ビールが呑めるなんて一擧兩得と云ふもんです。

富士山文献解題（四）　増山清太郎

冬期登山に關する文献一括（所藏者を記さざるは筆者所藏）

丸山教祖一代記略上巻（神道丸山教會本院編、明治三十六年十二月同院發行）

明治七年十月二十日、伊藤六郎兵衛が、吹雪を冒して、吉田口八合目以上迄登つた事が、書いてある。有名ではあるが、實は眞赤な嘘である。

柳骨生「雪中登嶽」及「登嶽餘談」（單行本「草鞋竹杖雪耶山耶」

所載帝國少年議會編輯局編、明治三十四年四月、博報堂

發行）

一月五日に御殿場口から登山した記事の由なれど、本書は二三の書目に解説を見るのみ、未だ管見に入らぬので、詳細は不明である。

佐藤順一「寒中富士登山記」（山岳第二年第一號其他所載）

明治四十年一月二十五日、筑波觀測所長佐藤順一、同所技師筒

井百平の兩氏、御殿場口より登山したる記事。

小島烏水「雪中富士登山記」（山水美論（文語體及）日本アルプス

第二卷（口語體）所載）

明治四十年十月二十七日、同氏の弟と共に御殿場口より登山。

この紀行は始め横濱貿易新聞に掲載した由、山岳第三十年第一

號に著者が述べてゐる。

探險世界第七卷第三號（明治四十二年二月、成功雜誌社發行、日

本山岳會所藏）

明治四十二年一月九日、曾我部一紅外五名、御殿場口より登山

始め四十餘人の團體登山の豫定であつたが成功せず、精選され

た六人が再舉の結果、頂上に達するを得た。全卷この記事で満

す。

荻田小風「雪中富士登山記」（アラレ第七卷、第三號所載、明治

四十三年三月、アラレ社發行、明治新聞雜誌文庫所藏）

梅津健介と共に、明治四十三年の初日出を頂上に迎へんと、前

夜御殿場を發したが、案内人齊藤鶴吉が狐に化かされて一晩中山麓をウロついた、一月二日午後再舉を企て、二合目に一泊したが、翌日も七合目の邊で太陽が西に傾いてしまつたので、あきらめた。紀文より察するに、極めて未熟な登山者で、所謂道具オンチ。一片の意氣なく荷物を運び得なかつた態である。但し寫眞は上出來で、始めて山中の積雪状態なごを下界人に示したものである。この程度の登山？ならばまだあるが、その代表的なものとして擧げて置く。

鶴見宣信「スキー富士登山にする報告」（山岳第八年第一號所載）

大正二年一月一日、高田聯隊將校五名、吉田口より登山し、山

中湖畔に下つた記事。富士山にスキーを用ひた嚆矢と思ふ。

角倉邦彦「雪中富士登山報」（山岳第九年第一號所載）

大正三年一月一日、御殿場口より登山。

金井勝三郎「雪艇富士登山報告」（山岳第九年第一號所載）

大正三年一月四日、日本スキー俱樂部員七名、吉田口より登山

を試み、八合目に垂んとして、一行中の酒井薰氏がスリップし

大澤に墜落慘死した。冬季登山の最初の犠牲者として、當時可

成問題になつた事件である。

明治四十二年に曾我部一紅の調査した處に依るご、右の外に明

治二十七年三四月の交、横濱の外人が登山を企て、強力が六合目

以上に登るのを肯じないので、單身頂上を志したが、やがて負

傷した姿を、御殿場に現した。その後紀行を外字紙に發表したが

果して頂上に達したか否か、不明の由である。筆者も未だ調べて

見ない。また明治四十一年二月三日、倉田白羊が登山したさうであるが、これも当事者の報告に接しない。前掲アラレに野中至氏が跋を書いて「……天候準備兩ながら稍全きも、體力堪へかたきの故を以て、半途にして引返しながら、絶巒に達し得たりなご揚言するに至りては、實に沙汰の限りである。」と云つてゐるが、具體的に誰を指すのか、聞いてみたいものである。尤も最近同氏は亡くなられたとも聞くが……。

其他にまだく脱漏は多いと思ふ。

この頃から、富士山に關する限り、冬季登山必ずしも珍らしくなくなつたのと、富士山の人氣の衰へる時期に入るので、あまり文献も見當らないやうである。舶來登山家數氏の歸朝迄、冬の富士山は沈黙を守つた。

昭和に入つてからは、文字通り枚舉に違が無いが、その中で最も重要なのは、

遠山富太郎「富士山大澤口冬字登山山岳第二十七年第二號所載」同人「今冬の大澤口富士登山に於ける食料に就て」（關西學生山岳聯盟報告第三號所載）であらう。以上を以て、冬の富士山は一先づ打切とする。

（出席部員）本科四名、豫科十二名、専門部四名、他部員外三名。

今夏の計畫の最後の相談會。各パーティの人員、出發期日等を決定し器具、食糧等の微細な點に至る迄よく打合せをなした各パーティを列記せば左の如し。（姓名は責任者）

1、燕、槍、穂高 A班 柿原
ノ B班 森川

2、鳥帽子、槍

森川

3、北鎌尾根、小槍及笠

鷺野、小林

4、唐澤生活

小林

5、奥又白谷

小谷部

6、錫杖岳

森川

7、鋸、甲斐駒

柿原

8、尾瀬沼附近

原、高原

9、奥秩父

柿原

猶上高地のベース・キャンプ（自七月五日頃至八月上旬の責任者は小谷部とし、夏山本部を望月宅とせり。

※登行記錄は七、八兩月をまゝめ、夏山報告として發表いたしました。

山 岳 報 告

針葉樹會例會 七月十日（水）如水會館

（出席者）中川、吉澤、松木、村尾、芋川、小川、園山、吉澤（松）、鈴木、増山（以上會員）。

○夏山相談會 七月一日（月）於國立部室

キリンビール見學

八月十日(土)

(主人) 磯野。

(出席者) 中川、吉澤、矢作、松木、村尾、近藤、高橋、園山、吉澤(松)(以上會員)

鷹野、小林、望月(以上學生)

會員消息

太田又一君 大阪市住吉區阿倍野筋五ノ六六

堀岡 清君 門司市元清瀧町一丁目

久我氏方へ轉居

事實。そこで皆さんにお願は、その五十號の原稿をなるべく早く出していただき事。然も出來得るならば未だ紙上に顔を出さぬ沈黙型の人たちに依つて「へへー、彼氏が」と啞然たらしめる底の原稿が欲しいのです。會計幹事のふところ具合は餘り芳しくないのですが、五十號の爲なら自腹を切つても?幾らでも出す相でから、何十頁になつたつて驚くことはありません。没書は絶対になし。せいぜい所ではなく、必ずハガキ文でも宜敷いから顔出しなさる様に希望します。また來月の其五十號の付録に會員名簿を出しますから住所勤務先に變更のあつた向は至急御一報下さい。原稿の〆切は九月十五日、芋川まで。

×

×

×

×

昭和四年に創刊號を出してより、歴代の幹事諸兄の努力と會員諸兄の理解とに依つて、わが針葉樹會報も通卷第五十號の發行を目前に控えることとなりました。思へば御同様、感慨無量です。試みに創刊號以來のバックナンバー、そのいづれでも取り出して御覽なさるがいい。つゝましやかなプリントの紙面から溢れ出る友情の言葉、限りない山への憧憬、或は眞面目に或は軽妙に、恰も針葉樹例會の席上で聞く座談の様に何が面白いんだか判らないであつて然も不思議に牽きつけられる味。針葉樹會員のみ味ひ得る醍醐の美酒。それがはや五十號に達するといふ……奇蹟みたいな

一橋山岳部から針葉樹第八號を近く發行する相です。近頃の現役は——此處だけの内緒話ですが——相等チヤツカリしてゐて、我々一寸歯が立ちません。前號クマさんの三峠の岩登りでもお判りの様に「遠く異郷(?)の空に居る先輩達にも喜んで貰ひ度い」程の勇敢な豪傑揃ひなんです。その豪傑共も針葉樹の發行には流石に弱りましたと謝つて居るのですから、一つ會員諸兄の御援助を希望いたします。原稿締切九月十五日、林まで。又その道に経験のある諸兄の事ですから、經濟問題に關する御理解もありませうから、例の廣告募集に就いてお心當りもあらば御紹介願ひたいものです。關西方面でも一つ處女地開拓といかないものでせうか四五百圓稼いで戴くと助かるんですが。